

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四十卷 第五號

大正十一年五月一日發行

論叢

マルクスの比例的關係の鐵則

法學博士 河上 肇

租稅立法に於ける階級打算的態度

法學博士 神戸 正雄

社會哲學に於る主意的二元論的思想

法學士 恒藤 恭

我が國民所得の地方別研究

法學士 汐見 三郎

時論

間接稅の整理を論ず

法學博士 小川郷太郎

說苑

功利主義と生産政策

經濟學士 堀 經夫

地學觀社會學說に就きて

法學博士 財部 靜治

雜錄

僧侶と勞働問題

法學博士 財部 靜治

舊岡山藩の井田法

經濟學士 黒正 巖

地學觀社會學說に就きて (三、完)

財 部 靜 治

七

由來觀之社會地理は、自然的環境か何れの時代にも、社會發展の唯一原因たり、この基本假説を土臺とす、これは特殊の一義によれば、別に又夙に Hippokrates により、認識されたる一眞理なり即ち Hippokrates は空氣、水及地方に關する論文中、この眞理を諸國民に應用し、惟へらく「歐洲人は身體の構造及形態上區別せらる、これは季節の變化大にして頻繁たり、非常なる暑熱は嚴寒に次いて起り、大降雨は長期の乾燥に變り、風は又四時の錯行を複雑ならしめ、又之に助勢するによるものなり、私見によれば是等の事情は、歐洲人の形態をして、亞細亞人に於けるよりも、一層複雑ならしむる原因たり、風俗につきても同様に議し得へし、風雨の劇變頻繁にして、人心を荒ましめ、心の溫順優美ために喪はれんか、人性は幾分か野趣を帶ひ、交情に疎薄にして又性急となる、從ひて歐洲人は、亞細亞人に比して勇猛なり、氣候平靜不變なる所にありては、懶惰は幾分か自然的なり、之に反し動搖不定なる氣候の下、身體上にも精神上にも、活動の衝動は生れ乍らにして窺はる、懶惰不活潑なるかために、卑怯心増長し、勤勉し又疲勞するかために、活動力は増す、四季の變化頻繁にして、又劇しき所、外觀上の諸形式、諸風習及天稟も、極めて區

々たり、從ひて右季節變化は、人性を區々たらしむべき、原因として最も有力なり、その外食物を授くべき土地の性質と、水勢と共に之を考ふべきものあり、人々の生活振りは、其の人々の住める土地の性質に、關係すればなり、霜によりて荒らされ、又は炎熱により乾燥され、又防護物なき索莫不毛の一國土にありては、瘠せ細りたる、神經過敏の人々を見る」と。

又夙に法の精神に關する、政治的一論著の基礎として、氣候の影響を以て、諸國民及諸國の特質を決すべき、唯一因子たり、然らずともその最も重要な因子たりとし、かくて風俗、國憲の形態、商業、婦人の地位等に關し、立入りたる諸結論を下し、從ひて又正當に社會地理の、直接又固有なる先驅者視すべきは、Montesquieu なり、實に社會地理は Montesquieu か、感嘆すべき程巧みに、觀想又叙説せるものを敷衍し、又その理路を一層井然たらしめしものに外ならず。

されど右の著書と雖も、社會地理の原則以上、に、その説を展はせるものあり、即ち Montesquieu は氣候の影響を以て、全能視せず、別に風俗慣習等の社會的影響をも亦問へり「多くの事項は人を支配す、氣候、宗教、法律、政治の原則、過ぎ去れる事件の先例、風俗、慣習等は然り、その結果として、一の一般精神は形成せらる、そは一國民に於て、是等の諸原因中何れかの一つか、割合に力強く影響し、他の諸原因の作用か、それ相應に殺かるる度合によりて然り、自然及氣候が殆んど唯一の、支配力を及ぼすべきは、野蠻人につきてのみ然り、風儀は支那人を支配し律令は日本を縦きに律し、風俗は昔時 *Lacédémone* に於て、大影響を及ぼし、施政の原則と古代風俗とは、羅馬に於て同様なる作用をなせり」とは、氏の論旨なり、而も亦氏は特に *Voltaire* に

* Montesquieu, *De l'esprit des lois*. 茲に尙想起すべきは、本書著作されたる當時即ち 1847 年の比、その當時には嶄新又英明なる見解を、夥しく吐露せるを以て、模範視すべき單行本として、Sarmiento, *Civilta e barbarie (usi, costumi e caratteri dei populi argentini)* trad. ital. Milano 1889 あることなり。

より、加へられし適切の批評を、耐へ忍ぶの要ありき、即ち Voltaire は正當に、社會的、道德的、及智能的因子に對し、一層大なる意義を附與せんとしたり、即ち彼は論して曰く、「論者は虞らくは、氣候の影響を重んじ過ぎたり、論者は人間社會が特に先づ、幾多の小民族により形成せられ夫等の民族が多少開化せる後、大帝國に併合せらるゝことにより、その終りを告ぐと説くも、一層眞實なる相違は、歐洲人と殘餘世界民族との間に、存する相違にあり、その相違を生めるは、希臘人の事功たり、即ち歐洲の住民をして、他の萬民族に比し實際の優者たらしめしものは、アゼンス、マイリータス、シラキュース、アレキサンドリアの哲學者なり、假りに Xerxes かサラムスの戰爭に於て、勝利を占めしものとせんか、歐洲人は虞らくは、今尙野蠻たりしならん」と自然的環境を以て、社會發展に重大影響を、及ぼすの事由視せる、一切の歴史哲學者、文明史家、自然研究者、經濟學者たりし、Buckle (その著書中人の行爲及人間の歴史が、自然的法則及心理的法則により、支配せらるゝことを示さんせり、自然の四因子として、氣候、食料、土地、自然の一般性質を挙げ、印度と希臘との比較を以て、その研究を始めた)、Robertson, Buckle and his Critics, Lond. 1895: Buckle の偏し過ぎたる見解の、幾多評論に答ふる所あり) Herder, Witz, Honegger, Hegel (Marselli, La Scienza della storia. I. Le fasi del pensiero storico, Torino 1873 は、歴史の純正哲學編中、ヘルダー及ヘーゲルの進歩學說を、叙説又評論せり) Thiering (Urgeschichte der Indo-Europäer は評論せり、一國民が地球上に占むる地方は、必然その國民の幸運非運を決す、蓋し地理は終結せられたる歴史視すべく、歴史は作用せる地理視すへければなりき) Marshall, Peschel, Mensinger, Humboldt, Crawford 等に就き、一々その所説を窺ふは、煩はしくして又無益たらん、有名なる文人にして、環境問題に觸れし者をも亦學ぶか如きは、一層煩はしくして又無益たらん、茲には單に Goethe, Selbstbiographie 美的越味及氣質が、氣候により左右せらるる

* Maznaghi, Le., "Relazioni Universali" di G. Botero e le origini della statistica e dell' antropogeografia, Torino '06.

** Buckle, History of Civilisation in England, Lond. 1857.

Stendhal, Rom 又大部分は美術的現象の社會地理現す(を、Taine の環境學說あるものを示すに止む、Squillace, Sociologia artistica, Torino 1900 参照)なれば茲には社會學者にして、Ratzel 及 Demolins の如く、社會地理學者とすへる程度に至らざるも、尙自然事情を社會現象の、基本視せる人々を、示すに止めん。(社會地理的、特例、研究は、社會地理として學問上の價值あるへき、唯一のものたるは力説さるへきも、一般原理を取扱ふへき本研究にありては、之を問はず、此點につき以上引用し、又今後引用すへき述作以外に擧ぐべきは De varietate, Vie des peuples du Haut-Nil, Annales de géographie, 1896-97, Mindoleff, The influence of geographic environment, Bulletin of the American Geographical Society, Vol. XXIX, n. 1, ; Battisti, Il Trentino, Trento 1898 など)

八

Spencer は社會現象を、內的、及、外的、に、分、け、 (茲に忘るへからざるは、Comte, Cours III, 235 中 Milieu に新語義を付すを宣言し、簡單明確に、「一有機體の生存に必要な、外界諸事情はその種類如何を問はず、その全部之に含意せざるを、milieu ならん、E. Dutoit, Die Theorie des Milieu, Berner Studien zur Philosophie XX, '99 参照) 後者中には氣候、地面、及動植物中、有機的無機的環境により、直接に左右さるるよりも、副次的諸因子換言すれば、右環境の進み行く諸變化として、社會事情そのものの一所産たるものにより、影響さること多き、部分を含意せしめたり、假令は氣候は山林の荒廢及乾涸により、變更され得へく、不用植物と有用植物との取替へ、又優良變種の培養、新有用種植物の扶植により、植物界は變更され得へく、動物界は不用又は有害動物の、驅除又は撲滅と、有用動物の育種及風土化とにより、變更され得へし、素より他の諸因子も、社會發展にその影響を及ぼすへし、社會を變せしむへき、人

* Spencer, The Principles of Sociology, I.

口密度増大、個人と社會との間、諸種の社會間に於ける、交互影響は然り、又言語、學問、藝術、風俗、法律等の如き、超有機體的構造物堆積の影響も然り、何れにしてもその間氣候と、國民の精力との間に一關係あり、最初の文明は溫熱にして、乾燥せる氣候の下に（埃及）起れり、（此見解に反し、Mongolie, Problèmes de l'histoire, p. 451 は寒冷又は溫和なる氣候が、大文明の發達を助勢すべしとせり、開化普及の事實は確かめられしもの之が解釋は未だ充分に下されず、Spencer その他の學者即ち Buckle, Mongolie, Reclus, Meischner, Kofit 等は、右普及の事由を氣候に歸し、Demolins, Ratzel 等は之を交通路に歸す、その他之人種の相違に歸せる Sergei 群の相異に歸せる Gumplovicz 及び Xropol, Les problèmes fondamentaux de l'histoire 參照。交通路に關する、所謂法則の「一つ」、Herder により立定せられ、他の學者により採用されし者は有名なるが、之によれば開化の普及は、地球の迴轉と反對の方向を採り、東より西に向へりとす、之は反對するものに Benlow, Les lois de l'histoire, Paris 1883 あり、又 Mongolie の前掲書は、「文明の統計」に基づきて、「高低の法則を立てて、開化が山より平原及海に下れりとし、別に又「緯度の法則を立て、開化は常に赤道より、兩極に進むとせり、要するに純地理的解釋は、本問につきても亦不充分なり、別に他の範圍に求むべき、他の事由を尋するの要あるものを示す。その他 Sergei Gumplovicz 等によるものの如く、此種の研究乏しとせざるも、それは常に偏頗なり、又 Oberziner, I destini del progresso umano, Roma 1894 は「開化の進展及方向を諸民族の混和により解釋せん」とせり）而して土地の形態は、政治形態を決定し、土地の複雑之と共に又、その動植物様々なるは、社會生活に特別の殊異を、生むべき條件たりとは、Spencer の認めし所なり。

De Greef は社會存在の、事實そのものによるも、尙社會が一切の無機、有機的因子により、左右されることを、推斷するの要ありと信したり、「大なる社會體は、無機界と有機界との、確乎たる結合に基づきて生ず、社會はその二乗結合の產物なり」、領土及人口は、社會の形態、構造及變動

* De Greef, Introduction à la Sociologie, Paris 1886, I, 47, 50.

を左右すへき二因子なり、「領土は謂はは女側にして、人口は男側たり、その間に解消し難き婚姻は結はれ、かくて種々の集合體、又は社會的產物を生む、」かくて De Greef は地の高低、廣狹及起伏、水勢、地質學的構成により、及はさるへき大影響を説明し、之か實地應用に及はせり、惟へらく「希臘の歴史は、希臘の位置及地理的形勢の、自然的結果視すへきなり、希臘が假りに多分第三紀層以前に、示せると同一事情を續け、サヘラの東部なる Libyschen 沙漠と、同様に荒れたる平地として續けられたりとせんか、そは獅子及犀の棲み家となり、決して大畫伯 Apelles 又 Aristoteltol の祖國とは、ならざりしならん、又羅馬の地理的地位か、小丘連互の中部にあり舟筏を通すへき一河川に臨み、而も亦海洋に近く、Sabiner 民族 Latiner 及 Etrusker 民族の境界接合地點に位せるより、疑もなくその最初發展に有利なりき」と、されど光輝燦爛たる希臘開化と、地理的外界の形勢との間、何等の直接關係あり得へきか、素より山嶽誌的水勢誌的特殊事情は、確かに交通を助進し、又阻碍することあり得へく、又その交通に本つき、内外諸關係の一系統を生み、その諸關係は諸民族の性質を動かし、一の社會的活動を果さしめ、次いて又その諸關係は、多種多様な社會事情として表はれ、民族固有の本質及最も卓越せる特質も、その諸關係により形成さることあるへし、されど羅馬の位置と、羅馬統治權の發達及大勢威、世界史上に類例なき最大事業との間、何等の關係ありとすへき、その位置上之かために、至適せりとすへきは確かに全く存せず、羅馬と同一否一層佳良なる條件を備へ乍ら、何等文明の發達を示さず、虞らくは貧弱又低級の、社會狀態を示せる都市は夥し、Pisa 市か一海港たるの事情止みたるため、

その繁昌衰はれたりと説くは、虞らくは解釋として完しとされん、されど一海港たるの事情を續けし、ウエニスの繁昌衰はれたるは、何かためにして、又ジェノア衰へざるは、何と解釋すべき。

De Greef の説に則れる Fairbanks^{*} も、亦外界の影響を、(イ)地面の地勢による影響(地位)、(ロ)氣候の影響、(ハ)人が直接に利用すべき、無機物有機物の影響(經濟)に分ちたり。

Sallilas^{**} は領土に、大なる重みをおきたり、『一國民の基礎は領土にあり、そは大に重んずべく、世界の國民全部は、領土に應じて分類され得へし、(現に氏はその著書第二卷中、事實上かかる國民の分類を試み、又埃及社會型の形成を、ニ河及 Sinai 山の地理的環境による、影響として解釋せり) 土地は人の直接又は間接なる支柱視すべく、かくて自然的の基本及生存資料の基本として、両面に於ける支持の働きに當る』世には沼澤地方に於けるか如く、直接には自然的支持者たることなき、自然的基本あり、河川及海洋面も直接には支持せず、又直接に支持するも、生存資料を備へざる土地あり、こは一切の耕地に於て、一般に見る所なり、即ち耕地は農耕の諸元素を、備ふるの特質により支持すこせり。Mattezi, Les facteurs de l'évolution des peuples, ou l'influence du milieu physique et tellurique et de l'hérédité des caractères acquis dans l'évolution et la dissolution des peuples, Paris 1900 參照。本著者は氣候に最大の意義を附與したり、開化は溫和なる氣候の下に起る、その開化が溫暖の度一層劣れる、諸國に進み行くとするも、そはその以前に溫和なる氣候に處して、容易に發達せるによるものなり、又氣候は諸國民に、特質及歴史的類型を附與す、北方民族と南方民族との間、その道德、風俗等の上に、示さるる諸相違は、氣候に基づくものたりと云ふ E. Worms, Le tellurisme social, Paris 1900 にも同様なる説あり)

是等の主張たる、事實に立脚するを以て、學問上の意義を具備するか如きも、之を反證すべき

* Fairbanks, Introduction to Sociology, Lond. 1899.

** Sallilas, La teoria basica (Bio-sociologia) II, Madrid 1901, S. 472.

事實にして、同様に保證せられ、又重さをおくべきあり、由是觀之一學說か、認識上の價值及永續性を收め得べきは、啻に事實に基づきて、立てられたるの一事によりて、然るに非ず、學問上の原則を嚴守し、諸事實につき周到なる論理的適法視察を、遂くるによりて然り、誤れる結論は觀察の手續を、充分嚴密に遂げさりしたため、如何に夥しく下されたるか、方法論の研究上、明かにせらるべき所なり。

九

Bagehot^{*} は適切に評論したり、氣候、否寧ろ土地、海洋、空氣、一般に自然條件の總和による、直接影響は、人々及諸人種の分化を促せりとは、諸時代の學者が想像する所なるも、經驗は此見解を否定す、即ち英國の移民は、濠洲人タスマニア人と、同一氣候の下に住むも、是等の人種同様となることなし、千年を経とも尙そのことなし、Wallace によると Papua 人種及馬來人種は同一熱帶地方に共棲し、又幾世紀を通しその共棲を續けたるも、二者は種々の點に相違せり、氏の研究は自然事情の直接影響か、動物につきても亦誇張されしことを示せり、氏は言へり Borneo 島は、その大面積と火山なきことによりてのみならず、地質學的構造の複雑、氣候循環の齊一その土地を被へる森林植物の一般性質によりても、亦 Neu-Guinea に酷似し、又 Molukken 群島は、その火山的構造、大肥沃、繁茂せる森林、頻繁なる地震により、比律賓群島に似たるものあり、爪哇の極東なる Bain は、モルツケン群島中の Timor 島同様、乾燥せるに拘はらず、是等

* Bagehot, Physics and Politics, p. 81, 86

群島の動物界には、最大可能の反對あり、そは右二群島か謂はは、同一雛形により形成されたりとすへく、同一氣候に沃し、同一大洋によりその周圍を、洗はるゝに拘はらす然りとす、即ち、Borneo 及 Neu-Guinea は、自然の土地事情につきては、一國として備へ得へき、酷似の極致を示せるも、その動物界につきては、互に相去ること兩極の如し、之に反し乾ける風、開きたる谷石多き沙漠、溫和なる氣候を有する濠洲は、Neu-Guinea の溫暖濕潤にして、樹木繁茂せる平地及山岳の森林内に、棲めると略同様なる、島及四足獸を産す、(地理的動物學は諸地方産動物の種類同じき理由を、自然的環境の諸事情一致に歸せんとするも、その恰も右の所説により、反對さるへき所なり、Miller, Reise der österreichischen Fregatte Novarra, Anthropol. Teil, 3. Abteil, Ethnographie, Leipzig, 1868. にある學説より、同一の理由により正當視するを得ず、その學説によれば國土の原住民開化の中心は、特殊の氣候條件、特殊種類の動物存在、地面の都合克き配列と、一致すへしとなす、されどかかる事情は、舊世界及新世界の數地方に於てのみ、遭遇さるへき所なり) Wallace の土俗學の見解中には、非議すへきものも亦存すへしと雖も、氏か根本的に研究せる群島内に於て、甚だ相違せる地方に、同様なる人あり、同様なる地方に、異様の人あるの事實は、何人も疑はさるへし、そは右の實例に於けるか如く、鮮明なるもの稀なりとするも、尙世界中その他幾多の地方に於て、示さるへき所なり、要するに氣候は、諸國民の形勢を決すへき、力に非るや明かなり、蓋し氣候は必ずしもかかる力たらず、氣候の作用加はらずして、國民の形成を見ること、珍らしからざればなり。

細目に亘りて察するに、カルセーデ人は羅馬人に比して力弱く、羅馬人は日耳曼人及ゴール人

に比し、一層懶惰ならざりしか、*Äthiopier* は埃及を侵略せざりしか、*亞刺比亞人* は一大帝國を、建設せざりしか、又秘露國墨西哥國は、誰により建てられしか、現に *Fouillée* は適切に評論せり「偏頗なる自然的環境學説は、不充分なることを明かにするため、空想上一旅行を遂ぐることを、攝氏十度の同温線を辿り行くものとせんに、その舊世界に於ける途上、*Liverpool* 倫敦、*Monaco*、*Budapest*、*Odessa*、*Khiwa*、北京、日本の北部を経由することゝならん、而して同一温度は、自然的同一型をも、精神的同一型をも、生まざりしことを發見せん」と、氏は又豊富なる材料に基づきて下せる、*Montesquieu* の學說評論中、*Souffret* の所説に賛成し、説いて曰く「*Tasmania* 人はその氣候、佛蘭西と同様なる、肥沃の一島嶼に住むも、介蟲并に多大の困難と戦ひて、捕獲せる數魚屬によりて養はれ、全裸體の儘途上を歩行し、その頭上にとまれる蟲を食したり、彼等の間には政府もなく、酋長もなく、互に獨立の生存を遂げ、かくて無政府の理想を、現實に示したり人は弱くして疑ひ深く、又意地惡るし、何等の好奇心を懷かず、又趣味を有せざりき」と、同一の趣旨を確かもへき材料は、無限に増し得へき所なり、

10

人類學者も亦人種に就き、社會發展のため最大の意義あることを、説かんとするの努力上、社會地理による主張の力を、弱むることに貢獻したり、假令は *Sergi* は説けり、「北米合衆國へは年々伊太利人、獨逸人、スカンデナヴィア人、愛蘭人、佛蘭西人、露西亞人、西班牙人并に支那人及

* *Fouillée*, *Psychologie du peuple français*, Paris 1898, p. 44.

** *Souffret*, *Disparité des races humaines*; *Fouillée*, op. cit. p. 41.

*** *Sergi*, *Decadenza delle nazioni latine*, p. 234, 236.

日本人等、由來移住し現に又移住す、凡て是等の民族は、同一の活動範圍を授けられ、又印度人より奪はれたる、大地域に土着し得たるも、その全部は同じ仕方に行動することなし、特にスカンデナヴィア人及北獨逸人活動の結果は、大部分は世に認めらるるも、伊太利人は波蘭人その他の者と共に、低級の勞働に當り、紐育の如き大都市内に於て、憫然たる生活に甘んじ、かくて社會生活のための、第一方便にして、又最も有效なる手段としての、同國語習熟につき、何等試みる所なし、その以上に尙刑事統計によるに、米國に於ける伊太利人は、その本國に於けると同様罪を犯すこと多く、加之秘密竊盜仲間 *Camorra und mafia* をも同國に移植す、南米にありては約四百萬人の伊太利人、伯西及亞留然丁に亘り、幾多の西班牙人、葡萄牙人、その他の諸國民と交りて住めり、而して同地に何物をか發見し得へき、予は同地に伊太利的社會、又は混和の結果として生れし米國的社會にして、北米の社會と競争し得へきもの起れりとは信せず、否尋常社會並みとすへきものを、相去ること遠し」と。(米國に於ける現今社會現象を、客觀的に目撃せる一生理學者としては地理的環境により、社會の出來事に及ぼす影響、妙きを認むるの外なし) Mosso, *La Lemocrazia nella religione e nella Scienza*, Milano 1901. 特に又 *Studi sull' America*, Nuova Antologia, April 1902, p. 409ff. 參照)

右の事實に誤りなし、されど之を以て率直に、人種の特色によると斷するは、嚴密なる論理に協はず、Sergi は引續き説けり、「予か茲に説ける所によらは、所謂人種が無關心たり得へきものたるか、將た一顧を値ひすへきものたるか、國民の偉大又は貧弱を促すへき、原因の一つに數ふへきか、之を判別するに足らん、假りに無關心たり得へきものなりとせんか、米國に於ける伊太

利人は、スカンデナウシア人及北獨人同様に、強人となり、南米共和國は北米合衆國の、大發展同様に、國家的經濟的發達を遂げし筈なり」と、^{*}されど此論旨には、極めて複雑なる社會現象の解釋上、その事實に反して、簡單に過ぐるの缺點あるを見る、之に影響あるは、氣候に限らざると同様、人種にも限らず、然らば國民異なるにより、同一の自然的環境に處し、異なる心的社會的成團を示し、反對に異なる環境に處して、似たる成團を示すは何故たるか、そは明かに各國民として、夙に大に啓發されたる、心的構造を有するかためなり、そは徐々なる社會的過程の結果なるを以て、その最小部分に於ても、短かき年月内に於ても、その基調を喪はるゝ能はず、即ち移住し行く國民は、人種より湧き出でしものたらざる、右の心的構造を備へつゝ移住し、そは又自然的環境より湧きしものたらざるを以て、移住先きにて之を變するを得ず、一面右國民中の特殊分子が、その貧困と開化の點に全く缺けたることにより、安定高級にして又儲け多き、勞働に當るを得ず、寧ろ犯罪にその活路を求むとするも、そは人種及環境と何等の關係がある、伊太利の海外移住か、窮乏及犯罪の輸出たるは、世に著名なるか、かかる移住と右の事情による影響とを結びつくるは、一層容易にして、一層論理に協ひ又穩當とすべきものあらん。(地理的環境の風教、智能等に及ぼす影響に關しても、人種に於けるも同様なる論旨行はる、Colajanni, *Sociologia criminale*, Per la razza maledetta, Latini ed Anglo-Sassoni 等參照。而して此點に關する誇張説は、一例だけ挙げんに、Beard, *Neurosis Americana*, 1894 は即ち然り、之によるに北米の土地及氣候は、歐洲人の皮膚色に影響し初め、之を赤色ならしむるの傾向あり、又その顔の表情に影響し初むとせり)

* Sergi, Op. cit. p. 237.

社會地理につき最も實用的にして又完全なる、應用を試みたる Demolins と雖も、自然的環境の、新影響あるに拘はらず、特殊の習慣及特質維持するの事實を、解釋するためには、他の一因子即ち人種に、助援を求めたることを示すは有用なり、即ち Rhone 河流域に於ける盆地の、社會型形成上遭遇せし障礙中には、歴史的根源も數へらるゝとし、「同地方にはその初め、ケルト人及イベリア人の混血民族あり、次いて地中海を渡りて到來せし、希臘及拉丁商人の支配者、之を統御せんとして來れるあり」(二七頁)と説き、又 Loire 河流域に於ける盆地社會型に示さるゝ、一新現象につき評論して曰く、「ケルト民族による根源か、此人口群に竄らし、又之をして Rhone 河及 Garonne 河流域に於ける、二先例と異なるものあらしめし新現象は、家族の不安定性大にして、閥族を構成するの傾向増大せるにあり」(二四五頁)と、別に又明言せり、「諸人種混血の影響は一様に土地利用の仕方にも現はる」(三四七頁)と。(下略)

二

社會地理は社會現象の完滿なる解釋と、するに足らざることを看取せるより、廣義に於ける、自然的環境の、諸特別影響を析理せんとするに至れり、かくて假令は交通路、又は國民及開化の太なる流れか、注きたる河床は、かゝる特別研究の對象として採られたり、前にも説けるが如く、Demolins は諸國民軍旅の大道に重きをおき、Ratzel は海に重きをおけり、又 Molli は説けり、
「地の凸凹否土地の形勢は、由來交通路及交通方便のために、多大の意義を有したり、現に又之を

* Demolins, Les français d' aujourd'hui.

** Campredon, Rôle economique et social des voies de communication, Paris 1899. 參照

*** Chiappelli, Il mare e la civiltà, Riv. Ital. Sept. 1701.

**** Molli, Le grandi vie di comunicazione, Torino 1902. 又 Rubio, Discurso sobre la sociopatologia, Acad. de Madrid 1890.

有す」されど「地の凸凹かその不平坦により、授くべき障礙以上に、尙氣候と人口稀薄とにより惹起さるる障礙あり」、「人口密度のみは、土地凸凹の諸結果に、變更を及ぼすへきも、氣候、肥瘠及産物の複雑性に對しては、從たる地位にあり」從ひて自然的諸事由は、社會生活のために諸條件を授くるも、そは又社會生活そのものにより變更せらる、Molliは Ratzel 同様、海に大なる意義を付與せり、(Cicotti, *La guerra e la pace nel mondo antico*, Torino 1901) は古代に於ける、一切の大戦争に於て、經濟的欲求が動機をなせることを示し、亞細亞大帝國の侵略、アレキサンダーの遠征、ペロポネサス戦争等を之により解釋せり。氏は特別の一社會型に於ける構造をも、亦交通路の輕易及土地の性質により、解釋せんとせるに拘はらず、自然的環境を何時も全能視せる者とは、相去ること遠し、交通路の影響は、種々の社會型を生むべき點に非ずして、現存諸型を統一せしむる點にあり。(Meshnikoff, *La civilisation et les grands fleuves*, Paris 1888) は古代に於ける四大開化が、大河に沿ひて起れるを示し、支那の開化は黃河揚子江に沿ひ、印度の開化は、インダス及ガンガス河に沿ひ、バビロン、アッシリアの開化は、チグリス及イウフラテス河に沿ひ、埃及の開化はナイル河に沿ひて起れり(せり)。

社會地理學者たらざる、前掲諸社會學者は、外界諸因子の意義を大に制限し、ために是等の因子による意義は、殆んど皆彼等によりて喪はるゝに至れり、Comte によるに自然事情は、社會的變動を促進せしめ、又は遲緩ならしむへきも、社會が自然に及ぼすへき、逆影響あることも忘るへきに非ず、之により自然は漸次社會化せらるゝとし、又 Spencer は言へり、「一社會の有機的及無機的外界か、その社會進歩の經歷中、如何に不斷又重大の變化を遂げ、又この變化は社會發展

* Molli, l. c. p. 15, 16, 25, 49.

** Molli, l. c. p. 55, 282, 283, 284.

上、如何に重大なる副次的、因子たるに至るかを、了解するためには、狼により棲まるる森林、又は野禽に富める一沼澤と、想ふに今日同一地方に占據せる、諸國民との間に於ける、著大の相違に想到するのみにて足れり」諸種の超越有機體的構作物は、何れも絶えず前進展開し、又交互に影響し逆影響を受けつつ、その全部結束しては、非常に包括的にして、複雑又偉大なる影響を及ぼすへし、社會發展の經歷中かゝる影響は、絶えず個人及社會を變化せしめ、他の一面には又個人及社會により變更せらる、(人は疑もなく地理的變化の有力なる一機關なり、Marsh, Man and Nature, Physical Geography, as modified by Man 及その最新版 The Earth as modified by Human Action, Lond 1874 參照。Pechanow, Beiträge zur Geschichte des Materialismus, Stuttgart 1896 は人の道具及武器を以て、敵の諸力を防ぐの用に供し、又環境を變ずるの力を人に授くへき自然的器官の延長視し、爾後人は外界に適應することなく、寧ろ外界は人に適應せしむ) その影響は吾人か社會そのもの、無生部分否寧ろ新環境視し得べきものを、漸次に形成し、その意義上本源環境を凌ぐことあるに至り、元來高級社會形態を立つるの障礙たりし、無機的有機的事情の下に、かゝる社會形態を編むこと可能なるに至ては、愈々重要となる」と、從ひて社會的因子複雑化の程度は大にして、副次的又は社會的因子の意義は偉大なり、間々本源の自然的因子に勝るに至る、こは「社會發展の原始的階段は、その後の階段よりも、地方的諸條件に左右さるること大なりとの、意味に解すべきなり、高き發展階段にありては、心的社會的影響は大にして、ために自然の影響は何れも曖昧に歸す、De Geer は自然的環境の、社會發展に及ぼす影響を大に力説し、ために大に發達せる現社會と雖も、その經濟、風俗、政治觀、哲學觀は之により決せらる

とせる人なるも、その影響かその普遍性必然性を、減し行く度合により、諸現象の分類系統並みに天文學的(氣象、氣候)影響、その他の自然的、地理的、化學的、無機的有機的影響に分類し、最後に心理的影響を挙げたり、そは諸現象か社會的とならんか、その本源の自然的因子により、影響せらるゝこと輕微に限らるへしと、なすの意なり。

現今社會地理學者を例外とせんか、自然的外界は影響を及ぼすのみならず、社會か一層大なる幾多の逆影響を及ぼすへきことは、一般に承認せらる、Bacon は Hippokrates の一言明を釋義しつつ、その著 *Novum Organum* の初めに書けり、「人は自然を制し又解釋す、自然は自から服従し命令するべし」[*Homo naturae minister et interpret, naturae si non obtemperat, naturae non imperat* 等、^{*}こは實に輓近社會學者により真理とせらるるもの、即ち人は自然の認識に努め、由りて之を制することを期すへしと、するの趣旨を認識するものに非ずして何ぞ、歴史の經過は、自然的環境と社會的群の心的構造との、諸條件により左右せらる、外界は社會に影響するも、之を變更せしむへきものとして然らず、先導すへきものとして然るのみ、人は外界の生存條件に適應しつつ、外界及自然力を利用し得べく、又かゝる影響によりて、諸國民の特質は決定されん。

要するに社會地理は、諸事實をその系統論の範圍内に、嵌め込まんと努むるかために、右の真理を忘る、素より社會地理は社會學のために、一層該括的にして適切又科學的なる、原理を捜さしむるの、支柱としては有用ならん、されとそは不完全なり、蓋しそは社會か、領土によりての

* Xenopol, *Les principes fondamentaux de l'histoire*, Paris 1899 同書二版 *La theorie de l'histoire*, 1908. 人は支配者として自然に對立する者、Spencer の後に Ward, *Dynamic Sociology*, N. Y. 1883; *Psychic Factors of Civilization*, Bost. 1893, *Outlines of Sociology*, 1898, Stuchenberg, Fairbanks, Lacombe, *L'histoire considerée comme science*, P. Barth, Eisler, *Soziologie* 1903, Goldscheid, *Entwicklungswerttheorie*, 1908 等

み拘束さるべき、獨立の個人により組成さるその、偏見を土臺となせはなり、謂ふ迄もなく社會現象は、極めて複雑なる原因結果を有す、又事實に基づき、その前提中に全く包まれざる、結論を下すは誤れり、自然的環境と國家形態との間に關係あり、自然的環境と精神的構造との間に、關係ありとするか如きは然り、その間々矛盾も伴へり、略言すれば社會地理は、社會學的總問題中の一面、即ち外界の人に及ぼす影響のみに、着眼するに過ぎず、別に人か外界に及ぼすべき逆影響あり、そは後日に至れば、唯一の影響を及ぼすへきも、全く之を問はず、地理的環境は植物界(動くことなく反應することなき個體よりなる)を解釋すへきものとしては完全なり、動物界(少しく移動し少しく反應すへき個體よりなる)を解釋すへきものとしても、可なり足れる所あり、之により人間(甚だしく移動し甚だしく反應すへき個人よりなる)を解釋し得へきは、その數面に過ぎず、その組成者の移動性及反應により、益々大なる新影響を生むべき、社會文明界につきては、その一面をも之により解釋し得へきに非ず。(完)

* Lombroso, Uomo delinquente, 1876; 5. ed. Torino 1895. によるも亦地理的因子重きをもちけり、Lombroso und Laschi, Il delitto politico, Torino 1900; Erskine May, La Democrazia in Europa, p. 12, 19, 43f; Niccifero, Forza e Ricchezza, 1908 参照